



どんな障害者でも地域の中で普通に暮らせるサービス体制を作ることが模索しています。「住みたい所に住めば良いじゃん」とこの町に住んで5月で満1年。道北地方で先駆けてバリアフリーなまちづくりが進んでくれることを願っています。大学の時代の専攻を生かして「名刺代わりに」とインスタットのSNS、Facebook(フェイス・ブック)上に自己紹介のページも作りました。「今のところ、町内から反応がないのがさびしい」とつぶやいています。

お昼どき。「共生サロンこころんに続く道を車椅子がころころ」とゆつくり向かいます。時間がある日はここで昼食を食べ、午後のひと時



▲車椅子で通勤(?) こころんに向かってランチタイムのひとつです

たちからこんな質問が出たそうです。「どういものを食べるんですか?」「食べ物はおかしくないとダメなんですか?」。

をゆつくりと過ごすのが日課。「なるべくいろいろな所に出掛け

「障害者に初めて会う子もいるので、とりあえず僕に会ってもらうことから始めます。キャンプに行った時、いろいろな所に行った時の写真を見せると『みんなと同じだ』と納得してくれる。バリアフリーは特別なことじゃない。『障害があるからバリアフリーが必要だ』ではなく『障害を持っていないくてもバリアフリーは便利だな』という程度に理解してほしい」。

今年3月、遠別小学校の授業に講師として招かれました。テーマはいつもバリアフリーと自分自身の日常生活のこと。そこで低学年の子供



▲遠別小学校でバリアフリー講演(3月5日)



▲こころんで開いた「第3回たすくゼミ」。旭川からアイスレジャホッケーのバンクーバー冬季パラリンピック日本代表、永瀬充さんも参加しました(1月24日)

ら乗車できるようになったそうです。でもそれではまだ不便ですね。

「バリアフリー車両そのものは、全国的に早い時期に導入しているのに…。車椅子利用者が一人で乗るのは自分が初めてなんですよね。東京に行くこと、一人どこへでも行くことができるんです。地下鉄と電車の乗り換え、バスにも普通に乗れます。障害者が外出しやすくなるように少しずつ壁を取っていきたい。『共生』は本当に難しい概念ですね」。

◇ 介助サービスを利用しながら札幌で約9年間暮らしました。東川に転居したわけは、「アパートの下見に来た時、大家さんとの出会いと『良いところだよ』という勧めがあった」。現在はパートナーの重紀子さんと2人暮らし。住み心地は? 「結構ハイスコア」と合格点のよう。昨年夏、単独でバスに乗ろうとしてバス会社に断られたそうです。「僕はただ乗ろうとしただけなのに…」。

佐藤祐さん/北町3

稚内市出身、32歳。北海道福祉教育・福祉環境アドバイザー。稚内北星学園大学卒業。高校まで養護学校寄宿舎で生活。稚内で大学生生活を経験し、自立生活への思いを強める。大学卒業後にDPI世界会議(障害のある人々の国際連帯組織のNGO団体)札幌会議(2002年)に参加。これを契機に、自立生活センター(札幌)の支援を受け、数年後必要な介助者を自分に派遣するための合同会社(現在休眠中)を自ら設立して札幌市内で自立。昨年5月、東川町に移住。道北地方に障害者の自立と社会参加のための団体が必要、と自らの体験を通してノーマライゼーション実現に奔走中。